



ウラン探鉱 ウラン濃縮技術の開発

ウラン探鉱

1. 事業整理

残存する海外のウラン権益の処分については、アーネムランドウェスト権益の海外企業への売却手続きを行った。

旧鉱区の原状修復（残留物撤去等）として、マ

ルガロック地区の現地追加作業を完了した。
オーストラリア法人の清算準備を行った。

（東濃地科学センター）

ウラン濃縮技術の開発

1. 原型プラント

第一運転単位（DOP 1）は2001年2月に、原料の供給を終了し、窒素ガスを封入し維持している〔第二運転単位（DOP 2）については、1999年11月に、窒素ガスを封入〕。

回収ウラン製品の輸送容器への詰め替えについては、全シリンダ31本のうち26本を終了した。

保安規定違反の再発防止策に関連する加工施設保安規定認可申請を2001年10月26日原子力安全・保安院に行い、11月1日に認可された。

第1回ウラン濃縮技術協力に係る運営会議を2001年12月4日に実施し、今後の日本原燃（株）へのウラン濃縮技術協力のあり方を検討した。

原子炉等規制法に基づき行われた原子力安全・保安院による施設定期検査について、2001年12月21日に合格証が交付された。

2. 滞留ウラン回収技術開発

濃縮機器やプラント内に滞留しているウランを回収することを目的とする滞留ウラン回収技術開発については、フッ化ガス（7フッ化ヨウ素）製造設備の設置工事を2001年6月に終了し、現在運転の準備を進めている。また、滞留ウラン回収のための機器を設置する準備として、DOP 2UF6操作室内の機器撤去工事を2001年11月に終了した。

濃縮工学施設においては、遠心機の寿命延長を目的として、1ヵ月間のフッ化ガス（7フッ化ヨウ素）による遠心機試験を2001年11月から実施した。

（人形：環境保全技術開発部）